

国立歴史民俗博物館の愉悦③

鬼瓦 (福岡県大宰府跡出土、複製)

原品：九州国立博物館、奈良時代 (8世紀)



国立歴史民俗博物館(以下、歴博)では、展示を構成するうえで、重要かつ必要不可欠な資料であれば、精巧な複製品を製作して展示している。歴博が展示品を鑑賞する博物館ではなく、日本の歴史を研究する大学共同利用機関であり、資料を使って歴史を語る博物館だからである。もちろん複製とはいっても、近年は三次元スキャナーなどを使って、原品とほとんど区別がつかないほど精巧につくられる。今回、紹介する鬼瓦もその一例である。

鬼瓦は大宰府政庁跡北方の水田から出土したもので、原品は重要文化財であり、九州国立博物館の文化交流展示室で展示されている。歴博では第一展示室「先史・古代」の最後のコーナー「古代国家と列島世界」に展示している。「古代国家の北と南」で大宰府による西海道(現在の九州)支配を解説しているところで、鬼瓦は、その迫力から目立つ存在となっている。

大宰府は大陸や半島との外交と西海道を支配するために、七世紀末から八世紀初めに設置された特別な役所である。都である平城宮に次ぐ規模を有し、「遠の朝廷」とも呼ばれた。その遺跡は都府楼跡とも呼ばれ、福岡県太宰府市に残されている。大宰府政庁はその中枢にあたる。鬼瓦は政庁建物の屋根の棟端の飾りに使われたものと推定できる。

鬼瓦は上端が緩やかな円弧を描く台形の形状をとる。現在、左下端が大きく欠損している。高さ約50cm、幅(最大)約四五cm、厚さ約一五cmである。一般的に、この時代の鬼瓦は、板状で平板な表現をするにもかかわらず、この鬼瓦は立体感が豊かで迫力もった鬼面を表現する点が大きな特徴である。台形状の縁辺に沿って珠文をおき、その中に眉をつり上げ目を見開き、口をあげて牙と歯をむき出しにした鬼面を配している。その立体的な造形と迫力のある怒りの表現は、展示室の中でも異彩を放っている。立体的な表現から、同じ時代の塑像にもつながるところがあり、その製作にあたっては仏師がかかわったとも言われている。原型がまずつくられ、そこから范(はん)がおこされ、そこに粘土をつけて製作された。同じ鬼面をもった鬼瓦はみつかっているが、この鬼瓦は、もつともシャープなつくりである。

大宰府政庁では、このような怒りの形相をした迫力のある鬼が屋根の上からにらみを利かせていた。儀式に参加したり執務する役人たちは、身が引き締まる思いであったのではなからうか。いずれにしても、鬼瓦は画像的にも造形的にも第一級の鬼面の資料であり、「遠の朝廷」大宰府を象徴する資料といえる。今も展示室でにらみを利かしている。

(国立歴史民俗博物館 研究部教授 林部 均)